『怪世談』第十六話「越路」と雌鳥皇女物語

森安雅子

一

荒木田麗女の『怪世談』[1]は、全部で三十の短篇によって構成され、その殆ど全ての作品に典拠が存在すると想定されているが、現在までに何らかの指摘がなされているのはそのうちの十九篇に過ぎない。[2] 典拠の範囲については、唐宋の伝奇を中心とした中国の文言小説が大きなウエートを占めていると見られているが、[3]ま日本の古典に取材したものも存在するようである。第十六話「越路」は従来は典拠不明作品とされてきた一篇であるが、この作品については、雌鳥皇女物語と呼称される『日本書紀』巻十一・仁徳天皇四十年条の雌鳥皇女と隼別皇子のエピソードがその典拠に想定出来ると考えられる。

「越路」の梗概は以下の通りである。越後守の娘は左衛門尉の妻でありながら、尉の弟の内舎人と通じて駈け落ちしてしまった。二人の裏切りに激怒した尉や娘を心配する越後守がその行方を捜索するが、二人は越路で亡くなったとされる。翌年の正月、侍女の身に付けていた玉に見覚えのある越後守の北の方がその出所を尋ねると、越中介の妻から借りたものだと言う。その玉は亡き娘の所持していた品であった。介が娘を殺して玉を奪ったと早合点した越後守は、公に訴え出ようとして越中守に止められる。介から事情を聞いた越中守は、訴訟を断念する代わりとして、越後守のもとへ介を車に乗せて寄越す。ところが、娘の恨みを思う存分晴らそうと待ち構えていた守の前に車に乗って現われたのは、死んだとばかり思っていた娘だった。事件の真相は、娘と内舎人の心中は介に助けられて未遂に終わったものの、男の方は死んでしまい、生き残った娘も事件の後始末に手間取って今まで帰京出来ずにいたというものであった。玉は、お礼として介の妻に娘が贈ったものだった。

娘の玉をめぐって錯綜する周囲の思惑と誤解、そして結末でのどんでん返しが印象に残るこの作品における作者の狙いは、読者の意表をつくような事件の予期せぬ展開と意外な結末の提示にあったと思われる。これとよく似たストーリー展開を見せる第七

話「八十の街」について門玲子氏は、「作者の視線は高みからすべてを見下ろすのではなくて、三人の主要人物に寄り添って話を展開していく。前夜よこしまな友人が欺きに来たときも、まず乳母の目から見た角度で事柄を叙述する。約束の夜本人が現れて、前夜の男は偽物であったことが三人のあいだで発覚する。その時点が読者にも事の真相が現われるときなのである。伏線を敷いて、読者にそれとなく知らせる工夫は一切なく、事の発覚が読者にも新鮮な効果をもたらしている。」[4]と述べられているが、二作品に共通するこうした趣向は、『怪世談』という作品が内包する傾向の一端を示していると同時に、「越路」に関しては、このような作品の性格はその典拠との関係とも密接に関わるものであったと推測される。

本稿では、「越路」と雌鳥皇女物語との影響関係を明らかにするとともに、「越路」における翻案の手法についても考察を及ぼしてみたいと思う。

二

「越路」の典拠に想定される『書紀』の雌鳥皇女と隼別皇子のエピソードの内容は、次のようなものである。仁徳天皇四十年春二月、天皇は八田皇后の同母妹雌鳥皇女を妃にしようと、異母弟の隼別皇子に仲立ちを頼むが、皇子は密かに皇女に通じて復命しなかった。皇子の裏切りを知った天皇は当初二人を罰しなかったが、後に皇子の叛意の心を知り、皇子を殺害しようとした。危機を察した皇子が皇女と逃亡したことを聞いた天皇は、追っ手を遣わしてその死刑を命じた。皇后は皇女の重罪を認めながらも、殺しても足玉・手玉は剥ぎ取らないで欲しいと懇願する。しかし追っ手の吉備品遅部雄鯽と播磨佐伯直阿俄能胡は二人を殺した後、皇女の玉を奪って嘘の奏上をした。その年十一月の新嘗の宴席で、二人の内外命婦が手に巻いていた玉に見覚えのあった皇后がその出所を追求したところ、阿俄能胡の妻のものであることが発覚する。玉を皇女から掠奪した悪行が明らかになった阿俄能胡は死罪となるが、己れの領地を献上して死罪から免れた。

古代日本において聖代と讃えられた仁徳天皇の在位中に起こったこの著名な事件に関しては、『古事記』下巻・仁徳天皇記にも類似したエピソードが収録されているが、両書はその趣を大きく異にしている。具体的には、『記』の女鳥王は『書紀』の雌鳥皇女とは異なり、自らの意志で天皇の求婚を退け速総別王と通じ、天皇に反逆的な言葉を面と向かって投げ付けたり、天皇に対する謀反の意志を示して速総別王を誘うなど極めて主体的で積極的な女性として描かれていること、事件が起こった時の仁徳天皇の后妃が八田皇后ではなく大后石之日売命となっていること、そのため皇后が追っ手の将軍に皇女の玉を剥ぎ取らぬよう頼んだという記述が抜け落ちていること、また宴席に将軍の妻が玉をはめて出たため大后に見咎められて将軍が死刑となったこと、という点で

ある。これらの相違点を視野に入れながら、先ずは、「越路」と雌鳥皇女物語との影響関係を明らかにしていくこととする。

「越路」と雌鳥皇女物語の主要な登場人物は、次のような対応関係にある。

越後守の娘――雌鳥皇女
内舎人――隼別皇子
左衛門尉――仁徳天皇
越後守の北の方――八田皇后
越中介――播磨佐伯直阿俄能胡

また、左衛門尉と内舎人の兄弟という設定は、仁徳天皇と隼別皇子の異母兄弟という関係と一致するものである。

ところで、右で示した人物関係については、『書紀』『記』双方に大差は見られないのであるが、[5] 女主人公の造形に関しては両者に大きな相違が認められるところである。「越路」の展開をたどると、事件の発端となった密通は、越後守の娘が自分から積極的に行動を起こしたためではなく、「容めでたしと人にもいはれてすき者共の心を尽す多かりしに」という優れた容色を持つゆえに、「いみじき世の色このみ」である内舎人から言い寄られ、その結果として密通という事態に陥ってしまったと語られている。尉と内舎人という二人の兄弟の間で、自らの意志とは関係なく運命に翻弄される女性の姿が見受けられるのである。このような女主人公の受動的な態度は、『書紀』の雌鳥皇女に通ずるものであった。雌鳥皇女物語においても誘うのは隼別皇子の方からであり、その点、「大后の強きに因りて、八田若郎女を治め賜はず。故、仕へ奉らじと思ふ。吾は汝命の妻に為らむ。」と言って主体的に相手を選択した『記』の女島王とは極めて対照的である。[7]

次に、「越路」と雌鳥皇女物語とのプロットの対比を表示する。

	越路	雌鳥皇女物語
(1)	左衛門尉の妻でありながら尉の弟の内舎人と密通を犯す越後守の娘	天皇の求婚にも関わらず天皇の弟の隼別皇子と密かに通じる雌鳥皇女
(2)	密通が露見した越後守の娘と内舎人の駆け落ち	天皇の殺意を感じた雌鳥皇女と隼別皇子の逃亡
(3)	妻と弟の駆け落ちに激怒し公に訴え出て二人を罰しようとする尉	皇子と皇女の裏切りに激怒し追っ手を命じて二人を殺す天皇
(4)	侍女の肘に掛けられた玉が亡き娘の所持品であることに気付く越後守の北の方	命婦の手に巻かれた玉が殺害された皇女の玉に似ていることに気付く八田皇后
(5)	玉の出所を尋ねて越中介の妻から借りたことを聞き出す北の方	玉の出所を尋問し阿俄能胡の妻から借りたことを判明させる皇后
(6)	玉を証拠に越後守に掠奪行為を疑われる越中介	玉が証拠となって掠奪行為が発覚する阿俄能胡

ここで注意されるのは、右表で指摘した雌鳥皇女物語と一致する「越路」のプロットが、実際には、その作品展開においては作品前半部に相当することである。このことは「越路」の翻案の手法を考察していく上で重要な意味を持つと思われるが、これについては後述する。

さて、右表を基に『記』との相違点を「越路」に即して検討すると、「越路」と『書紀』が極めて近い関係にあることを確認することが出来る。一例として、右表の中から作品の一つの山場である(4)と(5)を取り上げて、三者を対照して掲げてみる。

此女房の中に武蔵とて若やかに容あるは、北の方ことにむつまじう召つかひけり。今日も人より殊にはなゝとさうぞき、臂にかけつる玉のいとあざやかなる光めづらかに見ゆるを、みやぎといふ童見めでゝ、「いといみじき玉かな、御前のにも増りてこそものすれ」といへば、人々もとりゝに見はやしつ。北の方聞てさし出つゝ、「いかなるものぞ、我も見んかし」とてさしよれば、武蔵、「何ばかりならぬ物を」と恥らひつるも心にくし。北の方見るに、去年はかなき夢に見なして、よとゝもにこひ聞ゆる女の玉なるものか。いとあやしう心得ずと思ひて、「いづこにかはもとめし」と問ふに、武蔵、「誠にはみづからのにはさぶらはず、人にかり侍りつ」と聞ゆ。北の方、「さて其ぬしは」といへば、「越中介の妻のなり」といらふ。

（「越路」）

是に、近江山君稚守山が妻と采女磐坂媛と、二の女の手に、良き珠纏けること有り。皇后、其の珠を見すに、既に雌鳥皇女の珠に似たり。則ち疑ひて、有司に命して、其の玉を得し由を推へ問はしめたまふ。対へて言さく、「佐伯直阿俄能胡が妻の玉なり」とまうす。(8)

（『書紀』）

爾に大楯連の妻、其の王の玉釧を、己が手に纏きて参り赴き。是に大后石之日売命、自ら大御酒の柏を取りて、諸の氏氏の女等に賜ひき。爾に大后、其の玉釧を見知りたまひて、御酒の柏を賜はずて、乃ち引き退けたまひて、其の夫大楯連を召し出して詔りたまひしく、

（『記』）

この場面を比較すると、「越路」が『記』ではなく『書紀』を利用した形跡は歴然としている。それは、「越路」と『書紀』に共通する(4)から(5)への事件展開に対して『記』では(5)に相当する箇所が欠落していること、「越路」と『書紀』では問題の玉を手に巻いていた女性はそれを越中介・阿俄能胡の妻から借りていただけで事件とは無関係な人物であったが、『記』では王の玉釧を手にして大后の前に出た女性は王から玉を掠奪した大楯連の妻自身となっていること、から明らかである。その一方で、この場面における「越路」と『書紀』は、文辞の一致こそ見出されないものの、重要な小道具として配置された〈玉〉をめぐって両者のストーリー展開に対応関係が認められるだけでなく、配役についても前述した以外に、武蔵――近江山君稚守山が妻・采女磐坂媛、越中

介の妻――阿俄能胡の妻、という対応が確認される。

「越路」において『記』よりも『書紀』が尊重されたのは、両者のストーリーの複雑さの差異にその理由を求めることが出来ると思われる。前述したように『記』には(5)に相当する箇所が欠落しているため、その分『書紀』よりもストーリーが簡潔な印象を与える。また、登場人物についても、『書紀』は玉の貸借に起因する人間関係の広がりによって『記』に比べて事件への関与者が多いという現象が見られる。「越路」の後半の展開が、越後守の早合点を契機として繰り広げられていくためには、ストーリーや人間関係のより複雑な『書紀』の記述を採用した方が都合が良かったと考えられるのである。

三

「越路」と雌鳥皇女物語との影響関係を一通り見てきたところで、ここで作者麗女と『書紀』との関係に着目してみたいと思う。麗女にとって『書紀』が、極めて深い関わりと意味を持つ書物であったことについては、「自叙伝（慶徳麗女遺稿）」にある次の記事がその事情を伝えている。

又その頃より、歌の方に心を入れて、和文をもかつ〴〵書き習ふ。これも良人のこのみにて、時につくの辞、豊臣大江等の弁なり。それより、日本紀をはじめ、我が朝の国史類、諸家の記等、又公事の書、有職の書の類をみるに、殊におもしろく、心とむるやうなりしかば、又、良人、「さらに仮名国史に似たらんことをも書出でよ」と望まるゝにより、「池の藻屑」を書きたり。是は北海先生の序あり。跋は岩垣亮卿なり。後三角先生も序を添へらる。次に「月の行へ」は、野公台の序あり。また、「作物語をも書きてよ」とあれば、「桐の葉」「小手巻」などかきてより、つゞきてあまたかきあつめて、書林などにつかはしけれど、さのみめづらしくもあらぬものゆゑ、後にはなかば反古になしき。又「山の井」廿九巻は、作物語に公事をかつ〴〵こめたり。「笠舎」五十四冊は、これも国史にならへり。[9]

（傍線筆者）

引用した箇所は、明和七年（一七七〇）から安永四年（一七七五）にかけての麗女三十九歳から四十四歳に当たる記事である。その明和七年頃とされる条に[10]、その当時愛読した書物の一つとして特に『書紀』の書名が挙げられている。明和七年の段階での『書紀』をはじめとする国史類を愛読した経験は、『池の藻屑』（明和八年二月成立）などの歴史物語の成立に影響を与えたと考えられ、麗女の文学活動において重要な意義を持つと位置付けられるものであった。

また「自叙伝」では簡潔な記述となっているが、「「笠舎」五十四冊は、これも国史にならへり。」とある『笠舎』（安永三年正月成立）は、『書紀』から直接の影響を受けて成立した作品として看過出来ない存在である。『笠舎』は、神武天皇から安徳天皇に

至るまでの事跡を叙述した長編の歴史物語で、『池の漢屑』『月の行衛』と同様に鏡物の影響を強く受けた作風であるが、その大和時代の記述に『書紀』の記事が主として参照されていることが千田憲氏によって明らかにされている。[11] 現存する『笠舎』の二本の写本、国立国会図書館蔵本（三十一冊）・名古屋大学図書館蔵本（三十二冊）は、ともに完本ではなく、仁徳天皇の条は残念ながら二本とも欠落しているために確認出来ないが、麗女は雌鳥皇女物語を含む『書紀』の仁徳天皇紀にも当然目を通していたはずである。

すなわち、『書紀』からエピソードを抜き出してきて、それをもとに一篇の作品を仕上げることは、麗女にはさほど難しいことではなかったと思われる。

『宇津保物語』が麗女の作品に及ぼした影響のように、[12] 麗女には古典作品や先行文学の研究によって培った成果を自作の物語に積極的に取り入れる傾向があった。[13]「越路」への『書紀』の影響もまた、その傾向の一つとして把握出来る。

しかし、『怪世談』成立以前に『書紀』から影響を受けて成立した作品が、『書紀』の性質からして当然のことではあるが、全て歴史物語に分類される作品であったことは少なからず注意されることである。「自叙伝」において麗女は自作の物語を、「仮名国史に似たらんこと」「国史にならへり」と「作物語」とに明確に分類した上で、『池の漢屑』『月の行衛』や『笠舎』は「仮名国史に似」せて書いたものであり、『桐の葉』『小手巻』『山の井』は「作物語」として書き分けたという意識が作品執筆の際に介在していたことを表明している。そして『怪世談』は、

庚申の夜の眠ざましとて、申楽がましきそゞろ言に、いとあやなき空言のあまた出来りつる……遼園にありし昔の人の跡にもあらず、仏の御教なる方便とかやにも事たがひて、唯雪の中の芭蕉とか、あるべうもなきひが言をあながちにかきつめつる　（十二話本自跋）

まことそらごとたどりもあへず、ほのかに老人どものかたりしを聞置けるまゝに、見ぬもろこしの事はさらにもいはず、この国にも、はるかに遠き世にたしかに有りけるよしいへる事をも、すべてまほならず、耳とくもあらねば、きゝたがへがちなるひが事のかぎりなるに、又いひしらず、かたはに見ぐるしき跡なしごとをさへうちまぜて、　（三十話本自序）

と、『桐の葉』や『小手巻』などと同様に麗女にとって「作物語」に認識される作品であった。[14] 同じく『書紀』の影響を受けて成立した作品と考えられるものの、歴史物語である『笠舎』と作物語である「越路」とでは、その典拠の取り扱いをめぐって両者に意識の隔たりが存在するのである。

四

「越路」の前半部における登場人物の言動が、主として『書紀』

の雌鳥皇女物語の内容を翻案したものであると想定出来るとした上で、次に問題となるのは、「越路」の後半部に見出される両者の相違である。「越路」後半部と雌鳥皇女物語との決定的に異なる点は、原話では、雌鳥皇女は天皇の遣わした追っ手の将軍によって皇子とともに殺害され玉を奪われてしまったのに対して、「越路」では、越後守の娘は情人と心中しようとしていたところを越中介に救出され、命の恩人である介の妻へ玉を贈った、という事件の結末である。「越路」におけるこの改変を、どのように解釈すればよいのだろうか。

この問題の解決に手がかりを与えていると思われるのは、第二十七話「朝の雲」である。某博士はある日偶然出会った女に夢中になり、ついにその夜夢の中で女と出会い扇を取り交わすが、驚いたことに夢から醒めると現実でも扇が入れ替わっていた。二人の縁を確信した博士はそれを根拠に女を得ようとし、女の父親から双方の夢が一致すれば娘を差し出すという約束を取りつけるが、女の見た夢の内容と一致せず、証拠の品だと思った女の扇は反って疑いの種となって女を得ることが出来なかった。この作品の原話に指摘されているのは、明の瞿祐の編になる短篇小説集『剪灯新話』の中の一篇「渭塘奇遇記」であるが、[15]「奇遇記」の内容は「朝の雲」とは異なり、男女の見た夢は一致しており、夢の中でお互いに取り交わした指輪と扇のさげ飾りが二人の因縁の深さを証明し彼らを結び付ける役割を果たしている。両者に重なる重要なモチーフは、男女の夢の内容の一致と、夢の中の出来事の現実化であるが、「朝の雲」はそれらを「奇遇記」とは逆の方向に位置付け、原話の好青年の主人公を、妻子持ちで隠遁の心ざしがありながらふとしたことで美女に心奪われた挙げ句笑い者になるという博士某へとすり替えることで、原話のハッピーエンドを破綻へと導くやや辛辣な作者の視線を感じさせる作品に仕上げている。

「朝の雲」と「奇遇記」の関係を翻案の手法という観点から捉えた場合に注目されるのは、「朝の雲」は典拠の「奇遇記」をそのまま踏襲せず大幅な改変を加えてはいるものの、原話から完全に離れて脚色を加えるという方法を採ったのではなく、「奇遇記」の話を下敷きにしながらその結末部分において原話の逆転を仕組んでいることである。しかも「朝の雲」においては、そうした操作は「奇遇記」のストーリーを踏まえた上で意識的になされたものであったと考えられる。女の父親から二人の見た夢が一致すれば娘を差し上げようと言われて、「「唐土にもかゝるためしありきかし」と、したり顔にて心げさうもこよなく、うるはしきよそひ、いたく引つくろひて」と、お互いの夢を語り合わせるために女の屋敷に博士が赴く場面には、具体的な作品名こそ明記されていないが、博士と同様の体験を経て意中の女性と結ばれるという筋書を持つ中国種の原話の存在を暗示させることで、結末での逆転をあざやかに際立たせようとする作者の意図が明瞭に看取されるのである。

典拠の展開を追いながらその結末部分を逆転させて作品化するという「朝の雲」の手法は、「越路」の結末を考える上で重要な示唆を与えるものではないだろうか。

雌鳥皇女物語では、逃亡した華別皇子と雌鳥皇女の二人を殺害するよう天皇から命令を下された雄鯽と阿俄能胡は、同時に、皇后からは皇女の身につけている玉を奪ってはならないと言い含められていた。しかし、阿俄能胡は皇后の命令に従わず皇女の玉を掠奪した上、皇后に対しては玉は盗っていないと嘘の奏上をしたのであった。原話では、阿俄能胡が命令に背いて皇女の玉を掠奪し、その事実を隠蔽していたために、後日、奪った玉が命とりとなって悪事が露見することとなったのである。

一方の「越路」は、話の順序として先ず、密通が露見し駈け落ちした越後守の娘と内舎人が越路で亡くなったという報告が、越中介によって都の越後守の許に伝えられる。弟と妻の裏切りに激怒した尉が公に訴え出て二人を召し捕ろうとしたため、娘を心配する越後守がその捜索を越中介に依頼していたからであった。但し、ここでは雌鳥皇女物語とは異なり、娘が身に付けていたはずの玉の存在はまだ話の上に登場せず、話の早い段階で渦中の二人の死が語られるだけである。そして以後、事件は越後守を中心に展開していく。

玉が作品に登場してくるのは、その次の年の正月のことであった。侍女の肘に掛けられた玉が、亡き娘が生前に所持していた品であることに気付いた越後守の北の方が、それを守に告げたところから、事件は新たな展開を見せ始める。

北の方、やがてかう〳〵と語ればいたうおどろきて、「いとめづらかなりけりな、ろなう介が腹あしきにて、人をも失ひてしならん。さて物の聞へやあるとうしろめたくて、公事をかこちつゝ、国にのみ有てえのぼらぬなめり。よし今おほやけに申て、忽ちに思ひ知らせんずるぞ」と気色もかはりて、悲しなども思はず、心もおさめがたげによばひのゝしるにぞ、北の方もさもやと思へば、いとゞ悲しさやらん方なく、「何にさばかりのしれ者をしも、打とけて頼みきこえけん」と悔しう、とりかへすべくもなきをあぢきなくのみおぼへたり。守は、恨めしさのひたぶるなるまゝに、折節のびんなき事をもたどらで、すなはち、越中介我女を殺し侍りて、臂にものしつる玉をとりて、おのが妻にかけさせ侍るをたしかになん見給へし、あの玉は、世にめづらしきたからにて、又たぐひなき物に侍れば、まぎれ所なきしるしにさぶらふよし、うたへ文をさゝげて、公に参らんと出たつ程に、

娘の玉が介の妻の許へ渡っていることを知った守は、その玉が世に二つとない珍しい品なので、欲望にかられた介が娘を殺して玉を奪ったのではないかという疑惑を抱く。娘の玉をめぐって事件が意外な方向へ向かい始めたわけであるが、原話との関係において作品の展開を捉え直すと、守が抱いた介への疑惑は、阿俄能胡

の掠奪行為に対応している箇所であることに気付く。話の順序が前後しているが、「越路」の話の展開に、原話の雌鳥皇女物語のストーリーが踏まえられているからである。しかし、もしこのまま原話の通りに話が進めば、次の段階としては、守の予想通り娘を殺して玉を掠奪していた介の悪事が露呈されることになるのだが、「越路」と雌鳥皇女物語の違いは、「越路」がこの後、物語のストーリー通りに話が進展していかなかったところに見出される。

話の展開は結末にいたって再び急転換することとなる。

内舎人なる男、もろともに世に在り侘て、越の海を虫明の迫門に見なして、身を捨つる折しも、介尋ね来て、はやう見付つゝ、二人ながらたすけしかど、男はかひなくて、女は玉の緒の絶ざりけるにや、いきかへりしやうなれど、そのなごりいたく煩ひしを、介、我家に隠し置て、まめやかにあつかひしかばなん、からうじてさはやぎける……又かの玉は、介が妻に女のえさせけるなりとぞ。

介に対する守の疑惑は、事件の真相が明るみに出ることで否定され、逆に介が娘の命の恩人であったという意外な事実が明らかにされる。雌鳥皇女物語の阿俄能胡と対応関係にある介は、「越路」においては阿俄能胡とは全く逆に、娘の命を助けそのお礼に娘から玉を贈られるという正反対の立場が与えられているのであった。

雌鳥皇女物語の阿俄能胡と「越路」の介との役割の逆転は、同時に両作品そのものの逆転の構図をも端的に示しているように思われる。「越路」の翻案に際して麗女が意図していたことは、原話を忠実に移し替えることではなく、素材とした雌鳥皇女物語のエピソードを、その大まかな枠組みを残しつつ作品中で如何に逆転させるか、であったと考えられる。その結果として、「越路」という作品の構造は、「朝の雲」で確認された翻案の手法と同様に、雌鳥皇女物語に依拠しながらも、その結末を原話と逆転させることによって成立することになったと推測されるのである。

ストーリー展開と翻案の手法の二点において『怪世談』の中で特異な存在感を示す「越路」は、『怪世談』が抱える知的な遊戯的性格の一面を顕著に反映する興味深い事例であろうと思われる。

注

(1)『怪世談』の本文は、十二話本は茨城大学付属図書館菅文庫蔵本、三十話本は天理図書館蔵本を使用した。

(2)中村忠行氏「荒木田麗女と『宇津保物語』」(『山辺道』創刊号・昭和三〇年五月)、石村雍子氏『怪世談』(朝霧叢書二二・しのめ書房・平成二年)解説、倉本昭氏「『怪世談』における荒木田麗女の翻案の手法」(平成六年度日本近世文学会秋季大会発表資料)及び同研究発表要旨(『近世文芸』六一・平成七年一月)、内山美樹子氏「近世小説と女性」第三章「『道中亀山噺』と『怪世談』」(『岩波講座日本文学史8　一七・一八世紀の文学』所収、岩波書店・平成八年)などを参照。

(3)『日本古典文学大辞典』第一巻(岩波書店・昭和五八年)「怪

世談」の項（瀬古まち子氏執筆）、注2の倉本氏研究発表要旨。

（4）門玲子氏『江戸女流文学の発見――光ある身こそくるしき思ひなれ――』（藤原書店・平成十年）第Ⅰ部第四章第四節「三十篇の不思議なお話『怪世談』」一四四～一四五頁。

（5）「越路」で重要な役割を演じる越後守に該当する人物は『書紀』『記』ともに存在しない。但し、「越路」の越後守の立場は、女主人公の父親として作品の重要人物の一人ではあるものの、事件の当事者というよりはむしろ事件の進行を促す狂言回しの立場にある。

（6）『記』の引用は日本古典文学大系『古事記・祝詞』（岩波書店・昭和三三年）に拠った。

（7）『記』の女島王は積極的に王権へ反抗する女性として造形されているが、『書紀』の雌鳥皇女にはそうした要素は全く見出されず、物語自体が王位簒奪を目論んだ隼別皇子の反乱物語の様相を呈しているとされる。都倉義孝氏「女島王物語論――古事記悲劇物語の基本的構造について――」（『早稲田大学高等学院研究年誌』十九号・昭和四九年十二月、日本文学研究資料叢書『古事記・日本書紀Ⅱ』・有精堂・昭和五〇年及び『古事記古代王権の語りの仕組み』・有精堂・平成七年に再録）、阿部誠氏「后妃の物語と王権――古事記・女島王の造形をめぐって――」（『古事記年報』三四号・平成四年一月）を参照。

（8）『書紀』の引用は日本古典文学大系『日本書紀』上（岩波書店・昭和四二年）に拠った。

（9）大川茂雄氏・南茂樹氏共編『国学者伝記集成』（国本出版社・明治三七年）六七七頁。

（10）千田安子氏「荒木田麗女年譜」（『女子大国文』四号・昭和三一年七月）、伊豆野タツ氏編『荒木田麗女物語集成』（桜楓社・昭和五七年）所収「荒木田麗女年譜」に拠る。

（11）千田憲氏「慶徳麗女の「笠舎」に就いて」（『京都女子大学紀要』十一号・昭和三〇年十月）

（12）注2の中村氏論文。

（13）伊豆野タツ氏「荒木田麗女の学問と素養――物語作品の素材を通じてみた――」（『実践女子大学文学部紀要』第十一集・昭和四三年九月）

（14）十二話本に付された勢陽散人井蛙斎の序にも、「神風の伊勢の国に荒木田氏なる女のやまと書よむ事を好みてたはぶれに作り物語若干部をあめり」と、『怪世談』の性格に言及している。

（15）注2の倉本氏研究発表。尚、「朝の雲」という題名は、直接には作品中の「行末のあふぎたのむる形見こそ朝の雲に立まさりけれ」という詠歌に基づくが、作品内容と照らし合せると、楚の懐王が高唐に遊んで夢の中で巫山の神女に出逢ったという『文選』の著名な故事を逆手に取った命名がなされていると考えられる。

〔付記〕

本稿は、平成十一年度岡山大学言語国語国文学会での口頭発表「『怪世談』における翻案の手法をめぐって」を基に、加筆・訂正したものである。

（もりやす　まさこ　岡山大学大学院文化科学研究科）